

平成22年6月14日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：20720093

研究課題名（和文） 修辞学の世俗化と崇高の問題

研究課題名（英文） The question of laicization of rhetoric and the sublime

研究代表者

玉田 敦子（TAMADA ATSUKO）

中部大学・全学共通教育室・講師

研究者番号：00434580

研究成果の概要（和文）：

本研究においては、17世紀から18世紀にかけて修辞学理論が変化する過程を、批判的に検討した。具体的には、17世紀後半からフランスにおいて数多く出版された修辞学関連文献を、ボワローとロンギノスの「崇高論」の受容、修辞学における「エネルギー」概念の発展、文化的ナショナリズムの問題など多角的視点によって分析し、その変化の内実と背景を明らかにした。最終的な成果としては、修辞学を啓蒙期という特定の時代的コンテクストに位置づけることにより、「言語」と「言説」を司る審級となる「法」の問題という、人文学における最重要課題に取り組み、雑誌論文6本と著書（共著書等含む）4本を発表した。

研究方法としては、2008年度、2009年度ともに8月に長期出張を行い、フランス国立図書館で調査を行ったほか、慶應義塾大学図書館等国内の大学図書館に所蔵されている資料を用いて考察を深化させた。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to analyze critically the process of the evolution of rhetoric theory between the 17th and 18th centuries. In such, we researched rhetoric manuals published from the last half of the 17th century, considering that reception of *Traite du Sublime*, written by Longinus, and development of the sensualist philosophy played an important role in that evolution.

The research in France, notably in the National Library in France and in several libraries in Japanese university such as Keio Media Center permitted us to complete this analysis.

By situating the Sublime or Energy, which were the key concepts of enlightenment in the particular historical context of Ancien Régime, this research achieved to clarify certain questions of the "law" – the instance that manage the "language".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：(1) 修辞学 (2) 崇高 (3) エネルギー (4) ロンギノス (5) 18 世紀文学 (6) 啓蒙思想 (7) 国際情報交換 (8) フランス：イギリス：アメリカ

1. 研究開始当初の背景

「修辞学」は古代ギリシアで生まれた「学」であるが、近世フランスにおいて、中等・高等教育機関、コレージュに設置された「修辞学」課程は、「言説を構築する能力」を養う教養教育を担っていた。17 世紀までの「ラテン語修辞学教育」が限られた貴族や聖職者などの支配階級に専有されていたのに対し、18 世紀に広まったフランス語を使用言語とする修辞学教育は富裕なブルジョワの子弟にも開かれていく。

Marc Fumaroli, *L'âge de l'éloquence* (1980)を初めとして、ここ30年来の欧米を中心とする「17世紀修辞学」研究は一つの時代を画するものであった。ところが18世紀の修辞学に関しては、前世紀の焼き直し、あるいはコレージュの教師など「二流」とみなされた作者の筆による産物とみなされる傾向にあった。そのため、申請者が修士課程入学以来取り組んできた、フランス国立図書館における当該資料分析は先駆的な研究と考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、修辞学理論が 17 世紀から 18 世紀にかけて転換していく過程を、ボワローとロンギノスの『崇高論』の受容、感覚論哲学の発展など多角的な視点から分析し、その全容を明らかにすることである。

具体的には、17 世紀後半から 18 世紀フランスにかけて数多く出版された修辞学関連文献を分析することにより、この転換の内実と背景を浮かび上がらせる。

3. 研究の方法

本研究の資料収集は国内とフランスにおいて行った。

(A) 国内における資料収集。国内で購入可能な書籍を購入したほか、図書館のILLサービスで論文を収集した。また学期中に本研

究に関する資料の充実している大学付属図書館(東京大学図書館、慶應義塾大学図書館、京都大学人文科学研究所図書館等)に適宜赴き、文献調査をおこなった。

(B) フランスにおける資料収集。夏期休暇を利用して、フランス国立図書館における資料収集を集中的におこなった。

上記の資料収集・分析は内容としては以下の4つの行程に分節される。

(1) 17 世紀修辞学教科書の調査と関連書籍の購入・分析。(2) 18 世紀修辞学教科書の再調査・分析。(3) ボワロー、ロンギノスによる「崇高論」の受容に関する分析。(4) 「感覚論哲学」を中心とした 17・18 世紀思想史関連資料の分析。

以下にその内容を要約する。

(1) 『ポール・ロワヤル文法』、『ポール・ロワヤル論理学』を中心に分析を行った。その一方で 17 世紀フランス修辞学教科書の収集に着手し、まず関連文献の系統的なデータベースを作成した。

(2) 18 世紀フランス修辞学教科書に関しては、博士論文執筆過程、および 18~19 年度の科学研究費による研究において、ほとんどの文献を収集済みであった。しかるに未収集の文献に関しては、フランス国立図書館における資料収集によって補完作業を行った。

(3) ボワローによるロンギノスの『崇高論』翻訳が、フランスのみならず、ヨーロッパ全土で広く読まれたことはよく知られている。しかし、ボワローとロンギノスによる「崇高論」が修辞学の理論にもたらした直接的な影響を探る受容研究は未だ見られない。崇高概念の歴史に明るい、サン＝ジロンの研究を参照して、ボワロー/ロンギノスの「崇高論」について分析を行った。

(4) 17 世紀から 18 世紀にかけての修辞学

における転換を考察するにあたり、この時代の思想的、文学史的背景を分析することは不可欠と考えられる。本研究においては、修辞学理論に大きな影響を及ぼしたと考えられる「感覚論哲学」に焦点を当てて考察した。その際、「感覚論哲学」と文学理論の構築を研究対象とする、パリ第4大学ミシェル・ドロン教授に協力と助言を求めた。

4. 研究成果

18世紀フランスにおいて発展した「世俗」修辞学は、突然変異のように出現したわけではない。本研究は従来等閑視されてきた、「世俗」修辞学の初期問題に着目している。18世紀、ないし19世紀を通してヨーロッパ世界に君臨し続けた、この新しい修辞学の生成過程を明らかにすることがその目的である。本研究においては、まず以下の2つの仮説をたてた。

(1) 修辞学におけるこの根本的変化において、1674年にボワローが自ら翻訳したロンギノスの『崇高論』に付けた序文が重要な役割を果たした。

(2) 神の意志と人間の自律性の協働を論じたロックの経験論から生まれた、コンディヤックの「感覚論哲学」も、修辞学において人間の「技術」の比率が高くなる過程を後押しした。

その上で、本研究においては、ロンギノス『崇高論』受容と「感覚論哲学」についての思想史研究を軸に、17世紀から18世紀にかけての修辞学の世俗化について明らかにした。成果の内容については、以下に詳述する。

18世紀初頭に、修辞学は「神のことば」に至高の価値をおいた古典主義修辞学から脱却する。17世紀後半、古典主義時代には、「神の息吹」を得た人間のみが優れた言説を構築することができると考えられていた。ところが18世紀になり、教会の勢力が弱まり、王権が弱体化するにつれて修辞学が「世俗化」する。この修辞学の世俗化は、「簡潔な表現に多くの内容を込めることによって、心を打つ」というボワロー/ロンギノス的な崇高論に基づいていた。

この崇高論にのっとなって、人間にも修辞学の

理想である「崇高な言説」を構築することができるとされたことから、修辞学は「語る技術」の学として生まれ変わる。18世紀には神学、そして主に修辞学の分野で用いられていた「エネルギー」も、神の力であると同時に、人間も言説の構築によって生み出せるとされるようになった。

実際、フランスにおいては、18世紀以降、小説など様々な「世俗的」文学ジャンルが発展するが、この発展は全てこの修辞学的転換に端を発していることを明らかにし、近代文学が創成する過程を照射した。

発表をおこなった媒体については以下に詳述する。(「5. 主な発表論文等」欄参照)

「修辞学の世俗化」については、雑誌論文①、②③④、および学会発表①図書①において分析をおこなった。また、雑誌論文⑤招待講演②図書②においては、「修辞学(感覚論)的エネルギー」の問題を考察し、雑誌論文⑥学会発表③においては、「崇高」概念の発展をフランスからスコットランドへの修辞学教育の移入を軸に考察した。また図書③④は18世紀の歴史書として重要な位置を占める研究であり、それぞれ複数の国内主要新聞に書評を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 玉田 敦子、18世紀における『オシアン』と崇高一文化的ナショナリズムの問題を中心に、ケルティック・フォーラム(日本ケルト学会)、(査読により掲載決定) 14号、2010、(印刷中)
- ② 玉田 敦子、世界と人間とのほざまで：近代における「エネルギー」問題、アリーナ(中部大学国際人間学研究所) 7号、査読無、2009、pp. 358-365
- ③ 玉田 敦子、18世紀「崇高」美学と現代の恐怖」、科学研究費報告書『20世紀における恐怖の言説』基盤研究(B)(課題番号 18320056、代表 田所光男)、査読無、2009、pp.57-76

- ④ 玉田 敦子、「教養」は習得できるか？近代ヨーロッパの事例から考える「教養」教育、アリーナ（中部大学国際人間学研究所）6号、査読無、2009、pp. 109-116
- ⑤ Atsuko Tamada, *La continuité des discontinus : le « sublime » dans la rhétorique et l'esthétique des Lumières*
（不連続の連続：啓蒙の世紀の修辞学と美学における「崇高」概念）、フランス語フランス文学研究（日本フランス語フランス文学会）、査読有、93号、2008、pp. 19-37
- ⑥ 玉田 敦子、18世紀の修辞学教科書における国家神話の創設、日本フランス語フランス文学会中部支部報告集（日本フランス語フランス文学会）、査読有、32号、2008、pp. 1-10

[学会発表] (計 3 件)

- ① 玉田 敦子、18世紀フランスにおける『オシアン』と「崇高」—アンシャンレジーム期におけるイギリス美学の流行、2009年10月18日、日本ケルト学会秋季大会、於：大東文化大学（東京都）
- ② 【招待講演】「A History of "Energy" in Modern Age」(近代における「エネルギー」の歴史)、2009年2月25日「Workshop on Superconducting DC Transmission and Distribution, MIT Plasma Science and Fusion Center, Boston (USA)」(高温超伝導直流送電をテーマとしたワークショップ、於：アメリカ、マサチューセッツ工科大学プラズマサイエンス・アンド・フュージョンセンター)
- ③ 玉田 敦子、『教養』教育は可能か？—18世紀フランス修辞学から現代への展望、2008年6月27日、中部大学中部高等学術研究所共同研究「高等教育を考える—アウトカムズを中心に」第8回研究会、中部大学（愛知県春日井市）

[図書] (計 4 件)

- ① 山口作太郎、河原敏男、玉田敦子、『新たなエネルギー革命に向けて—「高温超伝導直流送配電システム」実用化への展望（仮題）』ナノオプトニクス社（2010年

刊行・印刷中）

- ② 【学術翻訳（共訳）】アラン・コルバン監修『身体の歴史』（小倉孝誠、玉田敦子ほか計10名による共訳、鷺見洋一監訳）、藤原書店、2010年、654頁、担当箇所pp. 23-132
- ③ 玉田 敦子、『「教養」教育は可能か？—18世紀フランス修辞学から現代への展望』（中部高等学術研究所共同研究「高等教育を考える—アウトカムズを中心に」第8回研究会報告書）、*Studies Forum Series*、66号、中部高等学術研究所、2009、30頁
- ④ 【学術翻訳（共訳）】ジャン＝クリスチャン・プチフィス『ルイ十六世』（玉田敦子、橋本順一、坂口哲啓、真部清孝、共訳。小倉孝誠監訳）、中央公論新社、2008年、672頁（上巻）、担当箇所pp. 7-282（「序～8章」）

[その他]

ホームページ等

<http://www.chubu.ac.jp/about/faculty/profile/51218acfd6231ccc1e742c51efa06d8c2ea63bb4.html>

<http://www.isc.chubu.ac.jp/chukoken/achievement/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

玉田 敦子 (TAMADA ATSUKO)
中部大学全学共通教育室・講師
研究者番号：00434580

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し